新・奥会津だより
vol.5
2022 Summer

Flow【フロウ】

福島県奥会津の暮らしに息づく伝統文化は、只見川・伊南川とその支流に集約される豊かな水の流れの中で育まれてきました。
Flowは、奥会津の宝である「豊かな自然・伝統文化・ここで生きる人」を、皆さんと見つけていく情報紙です。

奥会津を
つなぐ人々

生まれ育った奥会津産の良質な会津桐を生かし、
愛らしいおもちゃや使い勝手のよい日用品をつくる
「木工房MEGURO」代表の目黒照枝さん。
大好きなふるさとでの暮らしを楽しみながら、
豊かで自立した地域社会をつくるために
日々さまざまな活動に取り組んでいる。

奥会津が誇る素材を生かし 木工と地域づくりに奮闘

偶然出合った本に導かれ 会津桐を使った木工の道へ

緑まぶしい柳津町の只見川沿い。目の前には畑が広がり、川向こうを只見線が走る。「こんなに景色のいいところで暮らしているのって贅沢ですよね。毎日がリゾートみたい(笑)」。『木工房MEGURO』代表の目黒照枝さんが目を細める。

工房の棚には奥会津産の会津桐を使い、目黒さんが一つひとつ手づくりした積み木、がらがら、マウスパッドなどが並ぶ。丸みを帯びたやわらかな形のそれらは手に取ると驚くほど軽く、なめらかでやさしい手触りが心地よい。「奥会津の雪と風土が目の詰まった良質な桐を育てるんです。地元の素材を生かしたものづくりは、この場所でしかできないと思っています」

目黒さんは三島町出身。会津桐が身近な環境で育ち、子どもの頃から絵を描くことや工作が好きだった。木工の道へ進むきっかけとなったのは、就職活動を控えた大学3年の秋にたまたま出合った一冊の本だ。「自分が納得できることを仕事にしたい、自然に関わる仕事がいいと思い、大学の生協で岩波新書の『森の自然学校』を手に取ったらのめり込んでしまって(笑)。著者の稲本正さんが塾長を務める『森林たくみ塾』が岐阜県高山市にあると知り、ここに行きたいと思ったんです」。森林たくみ塾で2年間木工の技術と森林・自然環境について学び帰郷。三島町生活工芸館で8年間、木工指導員として木工体験の指導や新商品開発に携わった。

新・奥会津だより Flow【フロウ】
こちらもチェック！
https://okuaizu.net/flowlist/

奥会津をつなぐ人々

世界規模で考え奥会津で活動 高校生の頃から変わらぬ思い

目黒さんは、2人目のお子さんの出産を機に三島町生活工芸館を退職。育児をしながら自宅で木工を続け、2015年、嫁ぎ先の柳津町に『木工房MEGURO』を開いた。

奥会津産の会津桐を使った木工品製作とともに、目黒さんが力を入れているのが地域づくり、人づくりだ。「高校生の頃、新聞で『think globally, act locally』という言葉に出合い、あっと思ったんです。世界規模で考えて足元から行動する。奥会津で活動して、ここから社会を変えていけばいいんじゃないかと気づきました」。福島大学行政社会学部に進学して地域づくりについて学び、森林たくみ塾の入学試験の面接でも「卒業後は地元に帰り、ここで学んだことを地域づくりに生かしたい」とプレゼン。その熱意が難関を突破しての合格につながった。

現在は柳津小学校などで森林環境学習指導を行い、子どもたちの〝木工力〟向上を助けているほか、地域の賑わいづくりとして2017年から「やないづ手づくり市」を開催している。昨年道の駅「会津柳津」から街中の「あかべこ通り商店街」に会場を移し、地元のハンドメイド作家・工芸品作家らが出店。今後は月1回・毎月第4日曜日に開催する予定だという。

やないづ手づくり市を始めた背景には、「自治体の力を借りなくても、低予算でイベントが開けることを地域の方に伝えたい」という思いもあったと話す。「私自身の木工を主としたビジネスもそうですが、奥会津が経済的に自立することが大切だと考えています。奥会津は景色が素晴らしいし、人柄もいいし、文化もおもしろい。素材がすごいんです。〝奥会津民族〟としての文化的価値を経済に変えながら維持していく。これを最終的な目標にして今後も活動していきたいなと思っています」

奥会津で生まれ育った〝奥会津民族ネイティブ〟がふるさとに誇りを持ち、戻ってきたいと思えるように。ふるさとで働き、生きる喜びを感じられるように。自分自身が楽しみながら続けている奥会津産会津桐の木工やイベント開催が、そんな環境づくりにつながったらいいと願っている。「スケールが大きい話になってすみません」と照れる目黒さんだが、高校生の時に出合った言葉を胸にこれからも世界規模で考え、奥会津の地で活動していくつもりだ。

空洞の中に硬い木のボールが入った会津桐がらがらは人気商品の一つ。桐の板を糸鋸で切った後ナイフで形を整え、紙やすりでなめらかに仕上げる

パズルとして遊んでもよし、飾ってもよしの会津桐組み木。写真の起き上がり小法師のほか、お雛様、鯉のぼりなど季節感あふれる商品もある

積み木、がらがら、組み木、マウスパッド、糸巻き（写真左上）など、定番商品は約15種類。ホームページのオンラインショップでも購入できる

目黒 照枝さん

三島町生まれ。福島大学卒業後、岐阜県高山市の「森林たくみ塾」で木工を学ぶ。三島町生活工芸館勤務を経て、2015年12月、柳津町に『木工房MEGURO』をオープン。奥会津産会津桐を使ったおもちゃや日用品の製造販売のほか、子どもたちへの森林環境学習指導、イベント開催などを通して地域づくりに尽力している。

木工房MEGURO

住所：柳津町飯谷字前林甲359-1
TEL：090-5234-2314
営業時間：9:00～16:00　※1週間前までに要連絡
定休日：不定休
https://mokkouboumeguro.com

ただでん掲示板 vol.5

只見川電源流域振興協議会からのお知らせ

奥会津文化施設連携企画

写真展 懐かしき東北・美しき東北

～福島県立博物館所蔵国際交流基金寄贈写真から～を開催

全体会期 2022年 7月22日(金)～10月10日(月)

本展覧会は国際交流基金によって2012年から行われているもので、東北の魅力を世界に紹介する写真展です。国際交流基金の厚意により、2021年には10作家123点の作品が福島県立博物館に寄贈されました。多面的な東北をテーマにした写真作品は、日本を代表する優れたコレクションです。

この度、奥会津地域の文化施設が連携し写真展を開催することとなりました。世界に発信された東北の魅力を伝える写真作品を、各施設展示と併せてぜひご覧ください。

東北電力奥会津水力館「みお里」（金山町）
※インフォメーションセンター併設
会期：7月22日（金）～10月10日（月）
展示写真家：小島 一郎

交流・観光拠点施設 喰丸小（昭和村）
会期：7月22日（金）～10月10日（月）
展示写真家：林　明輝

ただみ・モノとくらしのミュージアム（只見町）
会期：7月22日（金）～10月10日（月）
展示写真家：芳賀 日出男

奥会津博物館（南会津町）
会期：7月22日（金）～8月31日（水）
展示写真家：千葉 禎介

尾瀬写真美術館（檜枝岐村）
会期：7月22日（金）～10月10日（月）
展示写真家：田附　勝

峠 最後のサムライ

激動の幕末に、武装中立を目指した武士「河井継之助」

公開中

新しい日本をつくることを志し、民の暮らしを守るため戊辰戦争の際に武装中立を目指した河井継之助の後半生を描いた映画が公開中です。本作品は、6月16日～30日に開催されたカナダのトロント日本映画祭で、オープニング上映されました。映画の特設サイトと併せてぜひご覧ください。

『峠 最後のサムライ』
©2020『峠 最後のサムライ』製作委員会
配給：松竹、アスミック・エース

編集・問合せ先
新・奥会津だより「Flow」編集部（株式会社日進堂印刷所内）
〒960-2194　福島市庄野字柿場1-1
TEL:090-6852-0953（専用電話）　FAX：024-594-2041
Eメール：flow@nisshindo.co.jp

ご意見・ご感想をお寄せください。
奥会津だよりの定期購読を希望される方は、編集部まで、発送先（ご住所・お名前）をお知らせください。
個人情報の取扱いにつきましては適切に管理を行っています。詳しくは、日進堂印刷所のホームページをご覧ください。

奥会津 おくあいづ 歳時記の郷
自然の中に
暮らすいとなみ、
100年先のみらいへ。

最新情報はホームページでご確認ください。

只見川電源流域振興協議会
〒968-0006　福島県大沼郡金山町大字中川字上居平933番地
奥会津振興センター内
TEL:0241-42-7125　FAX：0241-42-7127
Eメール：tdrsk@okuaizu.net

只見川電源流域振興協議会の主催・共催事業については、最新情報をホームページで随時公開しています。
この冊子は電源立地地域対策交付金の事業より作成されています。

奥会津の美術館資料館

武田久吉（ひさよし）メモリアルホール

尾瀬を愛し、貴重な自然を守った植物学者の足跡をたどる

DATA **ミニ尾瀬公園**
武田久吉メモリアルホール、尾瀬書美術館、尾瀬写真美術館

檜枝岐村字左通124-6　TEL：0241-75-2065
開館時間：9:00-17:00（最終入園は16:30まで）カフェは10:00-15:00
開園期間：４月下旬～11月中旬（2022年は11月３日まで）
定休日（３施設休館日）：毎週水曜日　※園内散策は可能
　※５月GW・夏休み期間（7/21～8/30）は無休
入園料（３施設入館料含む）：無料

詳しくはこちら

尾瀬がダムの底に沈んでいた世界線があった!?

ミズバショウ、ニッコウキスゲ、草紅葉など、四季折々に美しい表情を見せる尾瀬。高山植物の宝庫であり、国立公園にも指定されているこの貴重な湿原にダムを建設する計画があった…。今となっては信じがたい話だが、明治末期から第二次世界大戦後にかけて幾度となく計画が持ち上がり、実現していた場合は尾瀬ヶ原や尾瀬沼が水の底に沈んでいたというから驚く。

この計画に反対の声を上げ、かけがえのない自然を守った立役者の一人が“尾瀬の父”と称される植物学者・登山家の武田久吉博士だ。尾瀬の自然を一足早く、気軽に楽しめる『ミニ尾瀬公園』の管理棟２階に「武田久吉メモリアルホール」がある。館内には博士の遺品や出版物、関連資料が多数展示され、その足跡に触れることができる。

武田博士は明治16（1883）年、イギリスの外交官アーネスト・サトウと日本人の母との間に東京で生まれた。子どもの頃から植物と登山に興味を持ち、生涯を植物の研究に捧げている。館内に展示されている直筆の「研究ノート」には絵や図解とともに細かい文字がびっしりと書き込まれており、博士の植物に対する情熱と探究心が伺えて興味深い。

ミニ尾瀬公園の中央に立つ管理棟。
１階にはカフェがある

QUIZ
武田久吉メモリアルホールからのクイズです！
答えを知りたい方は武田久吉メモリアルホールへ Go!

武田久吉先生は、〝日本の植物学の父〟といわれる牧野富太郎博士とも親交がありました。二人の交流が始まったのは明治33（1900）年、武田先生が採集したある植物の鑑定を牧野博士に依頼したことがきっかけでした。さて、その植物とはなんでしょうか？

全国の山を登り、高山植物を研究した武田久吉博士。生涯に何十回となく尾瀬を訪れ、愛し続けた（写真提供：檜枝岐村）

武田博士らの活動が全国での自然保護運動に発展

「武田先生は尾瀬の存在を世に広めた方でもあるんです」と教えてくれたのは、尾瀬檜枝岐温泉観光協会事務局長の平野文紀さんだ。武田博士が初めて尾瀬を訪れたのは明治38（1905）年。翌明治39（1906）年、小島烏水（うすい）らと創立した日本山岳会の機関誌創刊号に紀行文「尾瀬紀行」を掲載し、「此（こ）の世のものとも思はれず」とその素晴らしさを称賛したことで、一躍尾瀬の名が全国に知られるようになったのだという。

尾瀬にダムを建設する計画が持ち上がると、檜枝岐村出身の「長蔵小屋」初代当主・平野長蔵とともに博士はいち早く反対の声を上げる。新聞や出版物を通して尾瀬の貴重さを訴え続け、昭和24（1949）年、学者や登山家らと尾瀬保存期成同盟を結成。こうした活動が実を結び、やがて尾瀬だけでなく、全国での自然保護運動に発展していく。尾瀬が日本の自然保護運動発祥の地といわれるのはこのためだ。館内には博士が愛用したカメラや登山靴、平野長蔵からの書簡なども展示されている。尾瀬の美しい自然を守った先人に感謝しながら、ゆっくり見学したい。

行程、撮影記録、植物研究などが詳細に記された「山日記」

尾瀬檜枝岐温泉観光協会事務局長・平野文紀さん

檜枝岐の豊かな自然の中で楽しむ書と写真の美

ミニ尾瀬公園には「武田久吉メモリアルホール」のほかに二つの美術館がある。「尾瀬書美術館」は、二本松市出身の書家・丹治思郷氏の作品約50点を展示。毎年展示を入れ替えており、檜枝岐村の人と自然を愛した思郷氏渾身の書の世界を堪能できる。「尾瀬写真美術館」には山岳写真家・白籏史朗氏が撮影した四季折々の尾瀬の風景や花の写真が展示され、見る人をはるかな尾瀬へと誘う。１階奥の吹き抜けを飾る三条ノ滝の巨大な写真は迫力満点だ。

ミニ尾瀬公園は今年度から通年で入園無料となったのもうれしい。この機会にぜひ足を運んでみてはいかが。

尾瀬書美術館「思郷（しきょう）館」

尾瀬写真美術館

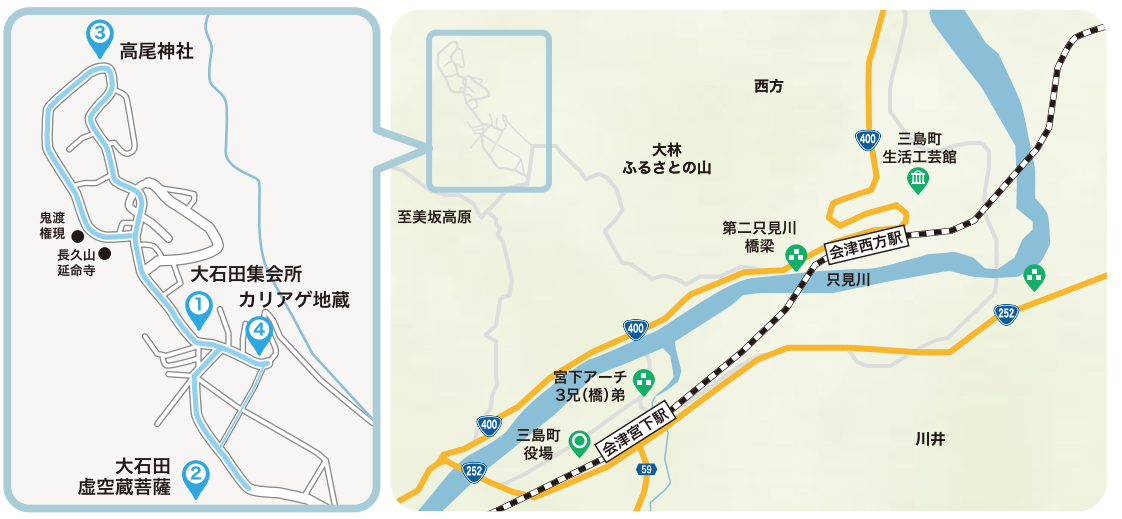
令和の奥会津風土記
～むらをあるく～
三島町大石田地区編

菅家博昭プロフィール　会津学研究会　菅家 博昭

1959年生まれ、昭和村在住、花農家。会津学研究会代表、昭和村文化財保護審議会委員長を務めるなど、会津地域を中心に調査を続けている。著作に『苧(からむし)～地域資源を活かす生活工芸双書』『暮らしと繊維植物』など。

二〇二〇年から始まった会津学研究会の「村を歩く(集落探訪)」は、会津藩官撰『新編会津風土記』(一八〇九年。以下『風土記』)に記載のある奥会津地域の村々の現在と比較することを目的として始まり三年目になる。二〇二二年六月初旬、赤坂憲雄氏(学習院大学教授)と村歩きを行い、時間や地域を超えたものの見方を学んでいる。

大石田居平遺跡は縄文時代の中期から後期の遺跡として、最近注目されている。



① 大石田居平遺跡

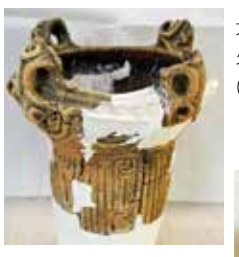
『三島町史』(一九六八)には、未確認遺跡として大石田で土器が出土していることが記載してある。二〇〇三年に町道拡幅工事等での発掘調査、二〇一七年に試掘調査、二〇一八年に発掘調査が実施され報告書が刊行されている。

新潟県の縄文時代の研究の進展はめざましく、特に二〇一四年九月に三条市が主催した「先史時代の文化交流～火炎土器の時代～」(於:諸橋轍次記念館)、この調査展示を受け里帰りした土器類を同年十一月に三島町交流センター山びこの「三島町の遺跡展」で展示した。また、二〇一八年に福島県荒屋敷遺跡出土品が国宝・重要文化財指定を受けたことで、二〇二〇年十一月の「三島の縄文展」でも大石田居平遺跡の土器が展示されている。山びこ収蔵品展も定期的に開催されている。

大石田居平遺跡は標高三四五mの沼沢火山の堆積物の上にあり、これまでの発掘調査で火炎系土器・大木式土器・阿玉台式土器など大量の土器が確認されている。ほぼ完全な姿の火炎系土器、王冠型土器の把手(とって)などが注目された。

三条市での展示会で、大石田居平遺跡の王冠型土器の把手は越後で製作された土器そのものが運びこまれたものと断定した。また、火炎型土器は胴部の文様が新潟県側のものとは異なるため、在地で製作されたものと考えられている。栃木県矢板市の高原山黒曜石は只見川流域の縄文遺跡から多数確認され、それが新潟県三条市の長野遺跡や長岡市の馬高遺跡で確認されており、こうしたことから八十里越を通じた先史時代の人々の交流が証拠づけられた。

大石田居平遺跡、金山町の寺岡遺跡、只見町の舘ノ川・礼堂・深沢の三遺跡などは新潟県側との交流を位置づける遺跡としている(三条市の展示パンフレットより)。


大石田居平遺跡
火炎系土器
(三島町教育委員会所蔵)

大石田居平遺跡
王冠型土器
(三島町教育委員会所蔵)

② 虚空蔵堂

大石田について、『風土記』では「オホシタ」村とふりがなが表記されている。江戸時代の書面では一般的に濁音等は表記しないが、発話では「おほしだ」と呼んでいたと考えられる。現在も同様の呼び名で(「おおいしだ」ではない)、江戸時代の呼び名が継続している。

『風土記』での家数は四十軒、端村の中野が五軒とある。寺院の項に長久山延命寺があり、「本尊虚空蔵客殿に安す」「鰐口一口　大石沢虚空蔵御宝前　勧進比丘明徳　大工塩又七郎、宝徳二年(一四五〇)」とあり、『福島県史第七巻』(一九六六)にも記載があるが鰐口は現存していない。

この虚空蔵堂信仰については、『三島町歴史文化基本構想』(二〇一一)中に、「おびんずるさま」崇拝として小柴七治氏による記述がある。

石段は二〇一五年に再整備したもので、大石田集落の南西端の高台の上に位置する。

③ 高尾神社

一方、集落北端の高台には高尾神社が位置する。この神社は以前集落西部にあったが、昭和四十一年(一九六六)に現在地に遷宮した(『会津御蔵入　大石田の民俗』一九七三年調査)。

石の鳥居から長い石段を登ると社殿がある。社殿脇には水神石祠(一九八一年建)が祀られている。これは地区の上水道水源地のため造立されたという。

鳥居と社殿の注連縄は、毎年大晦日に村の男たちの手で綯われ、その晩に新しい注連縄が奉納されるという。

高尾神社

境内には一本の大きな針葉樹があり、古い注連縄が巻かれている。その下部にはツキノワグマによると思われる爪の跡がいくつも残されていた。

三島町教育委員会がまとめた資料等によると大石田地区には九カ所の古蹟が登録されている。美坂高原近くの持栗遺跡(縄文中期～後期)、大石田居平遺跡(縄文中期～晩期)、高尾原遺跡(縄文後期)、愛宕山金秀院遺跡(平安)、上古屋敷遺跡・高尾神社跡・鶴巻ノ舘跡(中世)、大石田木地屋敷跡(近代)、三坂鉱山跡(近代)である。

④ 地蔵堂(カリアゲ地蔵)

集落入口のカーブの右側に石段があり、地蔵が安置された木造堂宇がある。二〇一八年に改築され、大工渡辺氏と棟木に記載され、幕も同年に新調された。石造の地蔵の台座下部右側には、享保十四年と刻されている。堂宇の周囲には石造物がまとめられており、無縁霊位碑(明治二十三年(一八九〇))、奉造立念仏供養塔(享保六年(一七二一))、結衆二十九人)、巳待供養塔(宝暦七年(一七五七)、講中十八人)、庚申供養塔(明和九年(一七七二)、大石田講中)である。

地蔵堂

⑤ 集落を取り囲む祈りの場

大石田は山間地にある大きな村落であり、かつての精神世界の有り様が考えられる場所でもある。南の虚空蔵堂をはじめ、北の薬師堂、東の毘沙門堂(中野地区)、西の観音堂他、集落を囲むように多くの社や堂宇、石祠が点在しており、延命寺北の道路脇の鬼渡権現のように、集落内でも祈りの場に出会う。

『三島町散歩』(奥会津書房、二〇〇四年)は町内の寺社の現在を克明に記載しており散策には参考になる。大石田の鬼渡権現については渡部姓の家の守り神と記載しているが、昔は子どもが産まれると丈夫に育つようにと参拝し、現在は渡部姓に限らず元朝参り等が見られる。また「会津民俗研究会編『会津御蔵入　大石田の民俗』(三島町教育委員会、一九九五年刊)」も参考になる。山口弥一郎氏、佐々木長生氏らが執筆した優れた集落誌である。

鬼渡権現

⑥ 集落の自然景観

村歩き当日は、シシウド、ヤマニンジンの白い花、シャクヤク等が咲き始めていた。屋敷内各所でサンショウの匍匐(ほふく)株から立ち上がった多数の枝には新芽が多数あった。

夏鳥として東南アジアから飛来するホトトギスの鳴き声も時折聞こえた。この夏鳥の仲間にはカッコウやツツドリ、ジュウイチもいて、奥会津ではよく鳴き声が聞かれる。

雨天で訪問ができなかった「樫尾のオナカナシ(オオウラジロノキ)」は、一七〇〇年代の境界紛争の仲裁時に植えたものと考えられているが、枯死寸前である。日本の巨木としてオオウラジロノキの第一位になっている。

シャクヤク

写真:菅　敬浩　菅家博昭